

これらの社員が列車ダイヤをどのような利用し、日々の業務を遂行しているかを紹介する。輸送指令員及び駅運行担当社員は、日々列車を正確に運行させるための管理をしている。このため、臨機応変の処置がいつでも可能なように列車ダイヤそのものを使用している。運転士は、自分の担当する列車の運転時刻を列車ダイヤより抽出し、使用している。車掌は、自分の担当する列車の運転時刻のほか関係する線区の接続列車の到着、発車時刻を列車ダイヤより抽出し、作成したデータを使用している。また駅

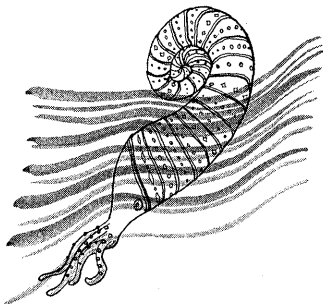
営業担当社員は、皆様が旅行される際にご利用される市販の時刻表を利用している。この時刻表も全国全線区の列車ダイヤより各駅の時刻を抜き出して作成したものである。

このように列車ダイヤは、鉄道の列車運行業務に携わる社員の羅針盤的役割を担っている。換言するならば業務指示書ともいえ、この指示書を遵守することにより、時間に正確な日本の鉄道が維持されている。

(JR東海)

知恵遅れの子どもの 生きている時間

榎沢 良彦



私たちの社会生活は計測可能な「客観的時間」の上に成り立っています。その一方で、私たちは「主観的・内的時間」をも生きています。これは私たちの生から切り離すことのできない根源的な時間です。私たちは客観的時間を重視しがちですが、私たちの生の質を左右するのはこの内的時間であるように思われます。なぜなら、私たちの経験が構成されるのは内的時間においてだからです。しかし、私たちは内的時間の様相を十分には把握していません。

日々、知恵遅れの子どもたちと接していると、彼らは私たちおとなよりも人間らしく生きているのではないかと思えます。なぜそのように感じられるのかを、一人の知恵遅れの子どもの生きている内的時間を明らかにすることで考えてみたいと思えます。それにより内的時間の様相の一端を理解できるのではないかと思えます。

◇K夫と私の楽しいやりとり

K夫と妹と母親の三人の姿が校門の外に見えた。私は広間の入口からK夫に向かって手を振る。するとK夫の笑顔が返ってくる。K夫の目に私の姿が入ったのだ。私に向けられた笑顔に私も思わず笑みを浮かべてしまう。私も楽しい気分になってしまったのだ。

K夫は妹と母親に先んじて元気よく広間にやって来る。私は明るく「K夫くん、荷物、教室に置いておいでよ」と声をかける。K夫はそんな事になっていく様子で、もうすっかり遊びの気分になっている。K夫は広間に入るや否や、私に「ゴリラ!」と話しかけてくる。他の保育者を指さし、私に向かって「ゴリラ!」と言う。私も即座に「あつ、ゴリラだ!」と答える。するとK夫は嬉しそうに笑い、さらに「ゴリラ!」等と言う。前学期まで自分の教室だった部屋をのぞいて、中の人たちを指さして「ゴリラ!」と言って面白がる。部屋からT先生が出て来てK夫をからかうと、K夫は私の所に逃げてく

る。

この日、K夫は学校に来る間、学校での楽しい一日を思い描いていたと思われれます。すなわち、K夫は未来に期待をし、未来に向かって生きていたのです。K夫は妹と母親に先んじて広間にやって来ましたが、荷物の片づけもそこそこに遊び始めました。

これはまさしくK夫が自ら未来へと向かって生きていくことを意味しています。楽しい気分とか高揚した気分というものは、人が自分の未来を創造していくことを可能にするもので、「未来志向的気分」と言います。笑顔で元氣よく広間にやって来たK夫は、未来志向的気分に包まれ、自分の未来を創造していたと言えるでしょう。

人が未来を創造しつつ生きるとき、その未来は確定してはいません。K夫は私と言葉のやりとりをしたり、T先生にからかわれたりしました。このように、他者からの具体的な行為を受け入れることがで

きるためには、未来が開かれていなければなりません。なぜなら、他者は本質的に不確定で予測できない存在だからです。したがって、K夫は「開かれた未来」を生きつつ未来を創造していたと言えるでしょう。

ところで、未来志向的な気分にあるとき、私たちは充実した生き方をする事ができます。K夫は誰かに促されたわけでもなく、自ら私に向かって呼びかけ、私からの応答をしっかりと受けとめ、生きいきと行動しました。そこには「主体」としてのK夫がいます。K夫は自分の人生の主人公として、「主体的存在」として存在しているのです。

「主体性」において存在しているK夫は「独自性」においても存在しています。K夫は私に元氣のよい声で「ゴリラー!」と呼びかけたり、他の保育者を指さして「ゴリラー!」と言ったりしました。このような他者への関わり方はK夫独自の関わり方、K夫らしい関わり方です。私はそのK夫の独自性に引

きつけられ、応答しないではいられません。

さらに、K夫は「自由性」においても存在していません。K夫はT先生や私の言うなりになって行動してはいません。彼自身の自由意志に基づいて行動しています。確かに、他者と関わるときには、私たちは相手の行動に即して自分の行動を規制しなければなりません。その意味ではK夫の行動は規制されているのですが、それは他者に強いられた規制ではありません。K夫は自らの意志で自己規制しているのです。やはり「自由性」のうちに存在しているのです。

このように、K夫は「主体性」・「独自性」・「自由性」のうちに存在しているのであり、そのように存在しえていることが彼を生きいきとさせ、楽しい気分にさせていると言えるでしょう。このような意識は「存在することの喜び」・「存在感」と言ってもよいでしょう。K夫の生きている「開かれた未来」は「存在可能にする（存在感をもって生きられ

る）時間」・「存在の生成と共に生まれる根源的時間」なのです。

ところで、私に向けられたK夫の笑みを見たとき、私は思わず笑みを浮かべてしまいました。それは、そのとき私の存在が生成したからです。K夫のまなざしにより「主体性」・「独自性」・「自由性」が私にもたらされ、その喜びを私は感じたのです。そして、K夫と同様、私は生きいきと行動しました。このとき、私も「開かれた未来」を生き、「存在を可能にする時間」を体験していたのです。

このように、知恵遅れの子どもたちのある者は「存在を可能にする時間」を生きており、私たち大人も彼らと接するとき、客観的時間から解放され、根源的な生の時間に回帰することができのです。そして、子どもたちと共に根源的な存在の生成を体験できるのです。

(母子愛育会)